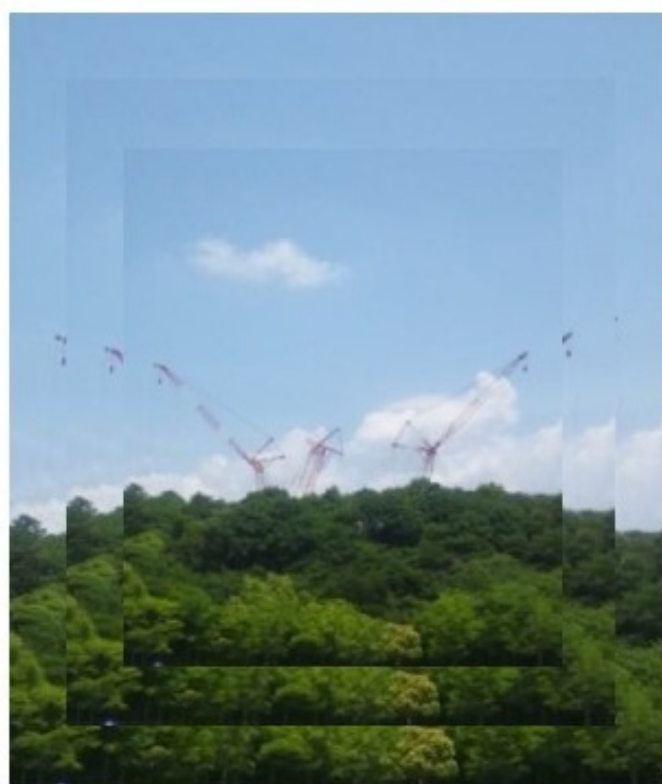


# とてもとても 短い話



月を捕まえた。

誰にも見つからないよう瓶に詰めて、閉めきった部屋でそっと眺める。

でもなんだか石ころみたいでちっとも綺麗じゃない。

ああ、そっか。太陽がないと輝けないんだっけ。

仕方がないから、窓から空に帰した。

元通り綺麗に輝く月を見ながら思う。

月はあの場所にあるからいいのだと。

女は人を石に変える。

それ故に、人は女の元にやって来る。退治するために。

だが女と対峙した者は、その心身の美しさに惹かれ、共に暮らす事を望む。永遠に。

しかし人の身に永遠など耐えきれぬ。いつしか泣いて死を請うようになる。

女は人の心の移ろい易さを嘆きながら、人を石に変えてやる。

就寝前に、眼球から記憶カードを取り出して保存ケースに入れた。  
次に別のカードをケースから取り出し、今度は耳にセットする。  
このカードは触覚とも連動していて、子守唄を聞きながら頭を撫でてもらう記憶が入っている。  
誰の記憶かわからない。  
でもこれを使うと、母の愛を知らない私でも幸せな気持ちで眠る事ができた。

「恋をしない？真似事でいいから」

万華鏡を覗きながら彼女が言った。

簡単に始まった真似事の恋は、彼女の表情に翳りが差した頃に呆気なく終わった。

彼女は何も言わなかった。

遺された万華鏡を覗く。

「どんなに回しても、二度と同じ模様を見る事はできないの」

彼女の呟きを思い出す。

「あれからどうしてたんだい？」

アリは訪ねてきたキリギリスに言った。

「こんなに痩せてしまって。もっと早く来れば良かったのに。私達は君の事が大好きなんだよ。冬になると新鮮な食材は手に入りにくいからね」

雪の降る夜。

暖かいアリの巣の中で。

アリ達がキリギリスの周りに群がり始めた。

幼稚園に子どもを迎えに行くと、園長に呼び出された。

園長は厳しい顔で

「お子さんが、毎朝ご飯を食べさせてもらえないと訴えています」

と言う。

慌てて弁解した。

「あの、今、炊飯器の調子が良なくて、それで最近の朝食はパンが続いて…」

気まずい雰囲気の中、園長室にうちの子の「ご飯がいいの！」という声が響き渡った。

時々、庭に猫のフンが落ちている。  
見張ってはいるが姿を見た事はない。  
頭にくる。  
気が付くと落ちている。  
まったく腹が立つ。  
いつも掃除だけさせて、一度も姿を見せないなんて。  
見つけたらただじゃおかない。  
絶対につんつんとかなでなでとかもにもとかする。  
...ああ、猫に触りたい。



連絡くらい、してくれたらいいのに。

また今日も、手付かずの冷めた料理を冷蔵庫にしまう。

いつ帰宅するのか、食事をするのかさえわからない夫を、ただ待つのに疲れてしまった。

そう言うと夫は「俺の飯は用意しなくていい」と言う。

本当にそれでいいの？

プロポーズの言葉は、「君の手料理を毎日食べたい」だったのに。

「爽夏が売ってないの」

妻が言う。

妻の田舎では必ず夏至に食べるそうさ。

気にもしてなかったが、しばらく経つと妻は虚ろな目で「爽夏...」としか言わなくなった。

妻の実家に連絡したら慌てて迎えに来て、とにかく連れて帰るという。

しばらくして妻は戻ったが、それから毎年夏至には帰省する。

爽夏の事は教えてくれない。

本を閉じる時の音が好き。  
特に大きくて分厚い本を閉じる「ばふっ」という音。  
微かな風と、それが乗せるその本独特の匂い。  
本の世界に引き込まれた私を現実に連れ戻してくれる大切な道標。  
夢の終わる合図。

だから今、その音が響くのを待ちわびている。  
この残酷な世界の終わる合図を。

TLの向こう側であなたが泣いているような気がして。  
とても気になるけど、どうしたらいいかわからない。  
悩んでいるうちに、あなたのつぶやきは普段通り明るいものに戻っていた。  
あなたは強い人なんだね。  
でもやっぱりまだ泣いているような気がするから、TLから目が離せない。

恋に落ちた。

許されるはずもない苦しい想い。

彼女の肌に、唇に触れたい。

もう普通の生活を送る事はできないだろう。

命を賭してもこの想いを遂げたい。

夕暮れ時、彼女の後を追う。

気配を察したのか彼女が振り向いた。

今だ！唇に...

「いやぁ！ 虫が口の中に！」

女性の悲鳴が響いた。

雨は嫌い。

でもジリジリと照りつける太陽も嫌い。

貧乏は嫌い。

でも忙しく働くのも嫌い。

汚い部屋は嫌い。

でも掃除は嫌い。

太るのはいや。

でも食べるものを我慢するのいや。

あなたも嫌い。

私の事を好きになってくれないあなたなんて大っ嫌い。

でも一番嫌いなのは我が儘ばかり言ってる私。

カレーにソース。野菜炒めにケチャップ。  
結婚当初は私の料理が気に入らないんだと思った。  
でも。  
炒飯にウスター。おひたしに醤油とマヨネーズと七味。焼き魚に...。  
あなたは調味料が好きなだけだった。  
向かいに座るあなたの姿も見えない程に立ち並ぶ調味料達。  
小さなため息をつく。

結婚してからずっと一緒に頑張ってきた。  
料理も満足に出来ない私を、いつも助けてくれた。  
なのに。  
最近のあなたは大声で文句を言い、肝心の仕事は不安定。  
知ってる？  
最近の若い世代は効率よく色々な仕事をするんだって。  
だから私も乗り換える事にしたわ。

長い間ありがとう。古くなった冷蔵庫。



「織姫も彦星も、本当はもう毎日会えるようになってるんじゃないかなあ？」

小学生の娘が夜空を見上げながら言う。

「どうして？」

と聞くと、

「だって、天の川なんてどこにあるのか全然わかんない。もう干上がっちゃったんじゃない？」

なんて肩をすくめる。

そっか。

今度一緒に、星がキレイに見える所に行ってみようね。

どんなに海が好きでも、海中に住む事は出来ないように...。  
どんなに空が好きでも空中に住む事は出来ないように...。  
どんなにあなたが好きでも、あなたの中に住む事は出来ない。  
せめてちっぽけな思い出としてでもいい。  
あなたの記憶の中で生きられたらいいのに。

今日は何故か妻の機嫌が悪い。

機嫌を取ろうと、妻の漬けたたくあんを誉めてみる。

昔から変わらないこの味がいいよね。

「そう？確かに一昨年までは漬けていたけど、最近買った物に変えたわよ」  
う。

「そういえば私も変わったのよ」

え？

「一昨日髪を切ったの。15cm ほど」

あ…。

母が私の部屋に勝手に荷物を置き始めた。  
抗議をしたが、  
「置き場に困ってるの。預かっというて」  
と聞いてくれない。  
そんな荷物がどんどん増えたので、私は家を出て一人暮らしを始めた。

ある日父が訪ねてきた。今日で定年だと言う。  
その時母からメールが。  
「しばらくお父さんを預かっというて」

「これが割れたから彼が浮気したって文句を言いに来たの？」

3年振りに会う魔女は割れた水晶を見ながら言った。

「貴女の熱意に負けて売ったけどこれはただの水晶。元々彼が浮気性だったのよ」

魔女は杖を取り出した。

「でもうちはアフターサービスも万全なの。3年前に戻してあげる」

ふと既視感を覚えた。

でも魔女に頼み続けた。

「お願い。どうしても彼と結婚したいの。この縁結びの水晶を売って下さい」

魔女は最後まで首を縦に振らなかった。

諦めて帰ろうとしたその時。

「彼とは結婚しない方がいいわ。3年後に浮気するから」

魔女はそう言って意味ありげにウインクした。

## ついのベタグの誕生日

---

今日は大好きなあいつの誕生日。

なのに「君も新しい奴らの方がいいんじゃないの？」と拗ねている。

理由を聞くと、どうやら自分は文字数が多いので、新しくできた日本語タグに皆が興味を持っているのが気になるらしい。バカね。

私はあなたの事が大好きなんだから。

誕生日おめでとう。

twnovel

## 幸せ

---

彼女を幸せにすると約束した。

結婚して、子供も産まれて、一生懸命働いて家も手に入れた。

贅沢は出来ないが、穏やかな暮らしを楽しんできたと思う。

そんなある日、彼女が言った。

「ねえ。一体いつになったら、私を幸せにしてくれるの？」



## 必要なもの

---

遠くばかり見ていたから、近くにいた君の変化に気が付かなかった。

いつも僕と同じ所を見てると思ってたのに。

君はいつの間にか僕の知らない事を覚え、そして僕を飛び越して見えにくいくらい遠くに行ってしまった。

君を見つけるのに必要なのは、そこまで行く勇気？それとも望遠鏡？

## 月に捕らえられて

---

夜空に浮かぶ煌々とした月を指し、彼が囁く。

「この月を君にあげる」

その瞬間私の心は月光に刺し貫かれ、まるで標本のように「あの時」に留められてしまった。

彼はすでに私から離れ、他の誰かに同じ事を言っているかもしれないのに。

今でもあの時の月が私を捕らえたまま離さない。

## 砂

---

女が踊ると指先から粉が舞った。

それが地面に落ちると花に変わる。

村は花でいっぱいになった。

「触れては駄目よ。見てるだけ」

珍しさに子供が手を伸ばすと花は砕け砂になった。

「触らなければ夢を見たままでいられたのに」

花は次々に砕け、大量の砂が人も村も女も飲み込んでいった。

## 私の知らない...

---

彼は私の知らない町でたくさんの友人と笑ってた。

結構楽しそうじゃん。

心配して様子を見に来た私がバカみたい。

こっそり帰ろう。

駅に向かうバスの中、彼からメールが届いた。

「休みがとれた。今から帰る」

やっぱり来なきゃよかった。

「駅で待ってるから連れて帰って」

なんてまぬけな返事。

## 流れ星

---

流れ星を探しに娘と夜の散歩。

肩車をしてやると、

「あ、1つ見つけたよ。あー。もう1つ！」

とはしゃいでいる。

そのうち静かになったのでどうしたのかと思ったら、

「流れ星がたくさん落ちても空の星が無くなりませんように」

と一生懸命お願いしていた。

## 流星群

---

あなたへの想いを砕いてたくさんの小さな欠片にして、こっそり流星群に混ぜました。

地上にいるあなたに、どれか一つくらいは気付いてもらえるかしら？

何も告げられないままここに来てしまった私の、後悔の色をした流れ星。

## 星に願いを

---

ある日宇宙人が現れた。

「お待たせ。迎えに来たよ」

何の話だ？

「この間僕に向かって『幸せになりたい』って念じたでしょ」

え？それは流れ星に願って…。

「さ、行こう」

ちょっと待って！

私が欲しいのは、未知のものに挑戦する類いの幸せじゃなくて、どこにでもある…

## 竜田姫

---

大きな網を持って君を捕まえに行こう。

たくさんの果物と君の好きな本を何冊か。

立派な樹の下で本を読む。

最初は大きな声で。

君の姿が見えたら囁くように。

近付いてきた君を捕まえて一緒に網に入って過ごすんだ。

一ヶ月もしたらそこから美しい竜が生まれて、秋の空を駆けるだろう。



## 早く気づいて

---

箒で空を飛べたり、呪文を唱えるだけで怪我を治すことができても、あなたの気持ちを捕まえるのは難しい。

あっちこっちで危ない事に首を突っ込んで、追いかけるだけで一苦労。

いい加減に気付いてよ。

あなたみたいな自分勝手な人、魔法使いの私とでなきゃ上手くやっていけないって。

## 抗生物質

---

傷付いたら薬を塗る。心に付いた傷にも？

「私は傷付いてない。全然平気」

まだ化膿もしないうちから抗生物質を使う。気付かないふり。感染予防にはなるかもしれない。

でも耐性ができちゃうかも。

悲しい時にはいっぱい泣いて傷口を洗い流す方がいい。

私も付き合うから。

話を聞かせて？

## 全部忘れて

---

泥のような意識の中を沈んでゆく。

いくら足掻いても思い通りにはならなくて。

深みに落ちていくほどに、私を押し潰す様な後悔と痺れる様な虚無感が強くなっていく。

ダメダメ。

何も考えないで。膝を抱えてじっとして。

しばらくしたらいつものように、また全部忘れる事ができるから。

## 野生

---

叔母が猫を飼った。

『野性的な方が好きだから』爪は切らないらしい。

その猫は今『ここなら引っ掻いていい』と閉じ込められた部屋のカーテンで困っている。

「にゃ？」

よしよし。助けてあげよう。

『爪が伸びてるから野性的』ではないし、それで閉じ込めちゃ可哀想だと叔母を説得しなくちゃね。

## 目が覚めた

---

目が覚めた。

彼は気持ち良さそうに寝ている。その顔を見てたらまた眠く...

目が覚めた。

彼女は気持ち良さそうに寝ている。その顔を見てたらまた眠く...

目が覚めた。

二人共まだ寝ている。その寝顔を見てたら腹が立ってきた。

いい加減起きてご飯を用意するにゃー！

## 生まれ変わる

---

彼女を追って天国に来た。

聞くと彼女はもう生まれ変わるころらしい。

諦めなさいという天使を振り切って探す。

いた、と思った途端、彼女は下界に飛び降りた。

僕も慌てて飛び降り、彼女を捕まえる。

「もう二度と離さない」

僕と彼女は双子として生まれ変わった。

こんなつもりじゃ...

## お城に

---

道に迷っているとお城に辿り着いた。

出てきた青年に、

「困ってるの。中に入れて」

と言うと、

「困るのは私の方です。お帰り下さい」

との返事。

交渉していると城の中から、

「お通しして」

と声がした。

青年はちっと舌打ちをした後で、私を案内しながら言う。

「絶対に逃げ切って下さいね。血の染みは落ちにくいから困るんです」

え？

眼鏡売りがきた。

過去か未来が見える眼鏡のどちらかを売ってくれる。

私は過去が見える眼鏡を買った。

早速かけると、今いる場所の時間がどんどん遡って見える。

建物が無くなりやけに見晴らしが良くなった。

と思ったら急に目の前で何かが弾けた。

驚いた拍子に眼鏡は落ちて割れてしまった。



眼鏡売りにもう一つ眼鏡を売ってとお願いした。

眼鏡売りは、

「特別だよ。本当は一つしか売れないんだ」

と言って、今度は未来が見える眼鏡をくれた。

早速かけると、今いる場所の時間がどんどん過ぎていく。

急に何も見えなくなった。

壊れてると言って振り向いたら、もう誰もいなかった。

## 記念日

---

結婚しようと言ったら怒られた。

「なんで今日なの?!」

意味がわからない。

今日は付き合い始めて4回目の記念日。良い日だと思ったんだけど。

「そうよ。今日はもう埋まってるの。明日ならまだ何の記念日でもないから、明日またプロポーズして」  
え？

「毎日を記念日にするんだから」

ノックの音がした。

懐かしい響きだった。

何年振りだろうこの音を聞くのは。

今日は特別な日だからな。

エヌ氏はドアを開けた。

そこには天使や悪魔、強盗、ロボットなど、いろいろなものが並んでいた。

慌ててドアを閉める。

今日一日で何回ドアをノックされるんだらうか。

ノックの音がした。

## 時間を止めて

---

時計の針を逆に回しても時が戻るわけじゃない。

いくらアルバムを眺めてもあの頃には帰れない。

どんなに抵抗しても未来へ押し出され、過去の世界の住人となった君との距離がどんどん開いてゆく。

ならば今ここで、僕の時間を止めて世界を閉じてしまおうか。

君とこれ以上離れないように。

## カナリア

---

大丈夫だよ。僕が助けてあげる。

すっかり怯えてしまった君を、両手で優しく包む。

象牙の舟も銀の櫂も用意できなかったけど、僕と一緒にいこう。

今日は仲秋の名月なんだって。きっと何もかも思い出せるよ。

夜の海に漕ぎ出す小さな舟。

空には冷たく静かに光る丸い月。

## 月と猫

---

月を見ていたら飼い猫が、

「お世話になったけど、そろそろ月に帰らなくちゃ」

と言ってふわりと浮かび上がった。

驚いてると猫はちょっと行っては振り返り、また行っては振り返りして私のことをじっと見つめる。

もしかして、ついてこいって言うてる？

猫はにんまりとしてにゃあと鳴いた。

## 使い魔

---

魔法使いは必ず使い魔となる動物とペアになる。

猫とか鳥とか、梟や鼠なんかが一般的なんだけど、私の使い魔は白兔だった。

何故か懐中時計を持っていて、いつも慌てた様にどこかに行ってしまうので、探すだけでも大変で、まったくもう。いったいどこに行ってるのかしら。

## いつも

---

あったかい。

あなたの胸に頬を寄せてそのぬくもりを感じる。

欲しかったものはたったこれだけ。

なのになんでこんなに大変だったのかしら。

あなたがあんなに抵抗するからだわ。

部屋が血だらけ。

苦労したのにもう冷たいのね。

あったかいのはいつも最初のうちだけ。

男なんていつもそう。



## アプリ

---

新しい地図アプリをダウンロードした。  
ナビ機能が付いていて、自分の居場所がわかるらしい。  
興味津々で実行すると何度も再起動を繰り返した挙げ句、  
「あなたの居場所はどこにもありません」  
と表示された。

## 夕暮れの公園で

---

薄暮の迫る街。

子供たちが家路を急ぐ。

誰もが自分の居場所に戻る時間。私は一人、公園のベンチでため息を吐く。

秋の黄昏はあっという間。

早く迎えに来ないと誰かに拾われちゃうかもよ。

とその時、

「もう。ぬいぐるみ、どこに置いたの」

とママの声。なっちゃんの泣き声も。

私はここよ！

## 猫と一緒に

---

飲み会の帰り道。

後をついてきた猫と話しながら歩く。とっても楽しい。

ふと気が付くと、猫は気になるあいつに変わっていた。

確かに酔ってはいるけれど。

これは夢なのか、猫が彼に化けたのか、もともと彼は猫だったのか。

んー。もうなんでもいいや。

ねえ君、気に入ったからうちの子になる？

## 写真

---

「僕の写真がない」

孫がアルバムを見て言う。

「まだ生まれてないんだよ」と教えてやった。

「じいじのものないよ」

...ほんとだ。

「俺のは？」

と聞くと、

「ありますよ。別のアルバムに。仕事が忙しくて家族と出かける事がなかったわりに、他の方とお出掛けになった時の写真は山ほど」

妻の声は冷たかった。

## 蝉

---

ベランダの柵に蝉がとまっていた。

鳴く事もせずにじっとしている。

次の日も、その次の日もそこにいた。

もう生きていないのかもしれない。

指先でそっとふれるとカサという乾いた音と共に、夏の名残が秋色の地面に落ちていった。

## 恋心

---

きらきらと輝くものが好きで巣に集めている。

最近拾ったのは恋心。

ほんわか暖かくて、寄り添っているだけで幸せな気分。

ただ時々きゅんと鳴って切なくなる。

このままじゃ使いにくいからもうひとつ同じものを見つけてきた。

すると燃えるように熱くなって、すぐに冷めてしまった。

## 大切なもの

---

大切なものはいつのまにか無くなってしまふ。

大切っていう気持ちばかりで、全然大事にしなかったせいだ。

今度は絶対に大事にしようと思ったのに、どこに隠したかわからなくなった。

見つからないまま探すのに飽きてしまふ。

「おまえ、鼻の頭が泥だらけじゃん。また庭をほじくり返したね」

わん....。

## 君のための

---

君のためのクッション。

君のための食器。

僕の部屋の中にある、君のための場所。

ほんの小さなスペースなのに、君がいないだけで部屋がいつもより広く感じる。

断りもなく出て行った君のために、ちょっとだけ窓を開けてあるんだ。

部屋と僕が冷え切ってしまう前に、早く帰っておいで。



## 巣立ち

---

狭い巣の中で競い合うように勝手な事を喚く。  
そうしていれば親がその口に餌を入れてくれた。  
僕にとって生きるとはそういう事だった。  
あの時までは。  
兄弟が巣から出ていく。  
巣で待っていてももう餌は来ない。  
心細い風に、頼りない翼を広げる。  
世界は懸命な生命で満ち溢れていた。

## 幸せの重さ

---

子供が産まれてふと考えた。

幸せの重さってどれくらいだろう。

妻と子供の重さ。お金や家。車もか。

全部支えていかないと。

考えていると妻が私の手をとって言った。

「私をお荷物みたいに言わないで。幸せの重さってきっと繋いだ手の重さよ。

長い人生、ずっと一緒に歩いていけるように」

## 絶望

---

絶望して列車に飛び乗った。あの世への直行便だ。

車掌はちらりと僕を見たが、何も言わなかった。

窓を過ぎる景色は思った程悪くない。

早まったのかも後悔していると車掌が来た。

「次の信号で停車します。乗り続ける絶望とあの時の絶望のどちらを選びますか？」

僕は迷わなかった。

## 満月

---

満月に誘われて散歩に出た。

ふと気付くと寂れた神社がある。

お参りでもしてみるかと鈴の緒を引くと、それは何の抵抗も無くするっと伸びた。

引けば引いただけ、どんどん伸びる。

しばらく引いていると、いきなり「そんなに引いたら月が無くなるだろ」と怒鳴り声。

はっとして見上げると夜空には、細く痩せた月が。

## 仕事

---

空に虹を描いたら、太陽に「それは私の仕事」と怒られた。  
虹を出してとお願いしたら、雨を待てと言う。

如雨露で水を撒いたら雲に怒られた。  
雨を降らせてとお願いしたら、仲間が増えたらねと言う。

箒で雲を集めたら風に怒られた。  
皆ちゃんと仕事してよと言ったら、  
「虹を出すことだけが仕事じゃない」  
と吹き飛ばされた。

## 例の

---

「私、変わってる？」

声をかけられ振り返ると、赤いコートにマスクをした髪の長い女が立っていた。

これはもしかして例の？

でも台詞がちょっと違う。

変わってないと答えると

「これでも？」

とマスクを外す。

全然変なとこないし。

そう言うと女は満足気に去っていった。

見送る後ろ姿には、ふさふさとした尻尾が。

「雨女だから天気が心配だったのよ」「晴れ男パワーの勝ちだね」

後部座席の友人達の、そんな会話を聞きながら運転していた。

「また信号待ち？」

そう言われてドキッとした。

実は僕は『信号ひっかけり男』なのだ。ほとんどの信号につかまる。

只今、助手席に座ってくれる『信号かわし女』さん募集中。

## 罪

---

「そんな事するなんて。悪いお母様ね」

病院のベッドの上。

ほとんど意識のない母は、私の話の時折そう答える。

惚けて全て忘れる事で、罪は無くなるのだろうか。

そんなの許さない。

母と私の間にあった話を聞かせて、母の中に罪を戻していく。

話したい事はたくさんあるの。

お願いまだ...



## 外来種

---

「外来種を放すと、生態系が崩れて在来種が絶滅してしまうこともある。

だから飼い主は責任を持って最後まで面倒をみないといけないんだよ」

お父さんは元宇宙飛行士。僕の自慢でもある。

でも何で今そんな話するの？

外で遊びたいって言うてるだけなのに。

僕は触角を震わせて抗議した。

## 小指

---

小指が這っていた。

ボロボロの爪に擦りきれた皮膚。

尺取り虫の様にずるずると動いている。

しばらく見ていたら車に轢かれて動かなくなってしまった。

なんとなく可哀想になったので、爪を磨いて赤いマニキュアを塗ってあげた。

道の端に埋めたら、いつの間にか小さな赤い花が咲いていた。

## ハロウィン

---

扉を開けるとクマが立っていた。

両手で『お菓子か悪戯か』と書かれた看板を持っている。

仮装？

戸惑っているとクマが歯を剥いた。獣の臭い。

慌てて蜂蜜を渡すと満足して帰っていく。

安堵した所に呼鈴が鳴った。

今度は看板をくわえたオオカミがいる。

ハロウィンってこんなんだっけ？

## やり直し

---

もし人生をやり直せるとしたらいつ頃に戻りたい？

そう聞くと君は「高校？中学？」と悩みだした。

今の君の中には、やり直さずに全てを棄てるという選択肢は無いらしい。

よかった。

「あなたは？」

見たくてたまらなかつた君の笑顔。

僕はもうやり直さなくていいんだよ。やっと会いたかつた君と会えたから。

## 迷子

---

時の狭間を旅していたら、人間の子を見つけた。

長い間ここで迷子になっていたらしい。

放っておくのも可哀想だけど、現実に戻してもすでに行くあてはないだろう。

一緒においでと言ったら首を振る。

お母さんを待ってるの。きつともうすぐ来るんだから。

ぎゅっと握った拳が震えていた。

## 葉

---

秋になると私たち葉っぱは色を変える。

山の色が変わる程の紅葉は人を招くため。

訪れた人をめがけて葉が落ちるのは荷物に紛れ込むため。

私たちは何かにくっついて旅をする。

どこかに運ばれても芽を出す事はできないけれど、それでも。

木に繋がり眺めていたあの場所に行ってみたくて。

## 寄生虫

---

私は人の頭に住みついて、記憶を食べる寄生虫。

少しだけの筈が、美味しくてつい宿主の「彼女の記憶」を食べ過ぎた。

宿主は彼女を忘れ、二人は別れた。

宿主にとって彼女は大切な人。

それは私みたいな寄生虫にだってわかる。

だから私が彼女を迎えに行くしかない。

深夜。

寝ている宿主からずるりと這い出した。

## 昔々

---

昔々。

小さな村に吟遊詩人が来た。

詩人は遠い国の悲劇を唄った。

村人は涙し、詩人を称えた。

同じ村に予言者が来た。

予言者は近いうちにこの村で起こる悲劇を話した。

村人は怒って予言者を追い出した。

そうしていつもの様に楽しく暮らした。

災いが訪れるまでの短い期間ではあったけど。



## 音

---

僕は生まれつき、生き物の出す感情を音として聞く事ができた。

虫の発する小さな音。

苛々してる人の出す地響きみたいな音。

笑顔から零れる鈴のような音。

世界は音で溢れていた。

そんな中、彼女を見つけた。

僕たちの音は心地よく調和する。

そして今日。

僕の耳はデュオがトリオとなる音を捉えた。

## 祖父と祖母

---

ほとんどの事を忘れてしまった祖母は、若い頃の祖父との思い出話ばかりを繰り返す。

自分の世話をしている老人が、その大切な人とわかっていないようだった。

きっと祖父も辛いだろう。

そう思って尋ねると、

祖父は、最後に祖母に残ったのが自分との思い出で、それを話す祖母が幸せそうで、ほんとに良かったと明るく笑った。

## 少女と獣

---

少女は、獣の銀のたてがみに顔を埋めて寝息をたてている。

銀色の獣は少女と駆けた戦場を思い出していた。

国の為に戦った結果がこれか。明日には捕まるだろう。

「最後はおまえの糧になりたい」

少女の言葉が甦る。

僕の気も知らないで。獣はため息を吐く。

でも君が敵の手に渡るくらいならいっそ...

# ヒト

---

「ヒトは全部処分するように言った筈です」

先生に見つかった。

「でも！地球のヒトは歌うんです。それはとても素敵で...」

僕はヒトの歌を聞くのが大好きだった。

先生は僕の肩に手を乗せ、優しく言った。

「素敵な歌を歌えても、命の奪い合いをするのでしょ？」

僕は泣きそうになった。

## 水溜り

---

猫が3匹、水溜まりを見ている。

ちゅぷん。

1匹が水音を残して消えた。

えっ。

2匹目が飛び込んだ。

慌てて駆け寄り、水溜まりに手を突っ込む。

...浅い。

3匹目の猫が責めるように「にゃあ」と鳴いた。

訳が分からないままそこから離れた。

振り返ると残された猫が寂しそうに、揺れる水面を見ていた。

## プレゼント

---

幼稚園生の娘が友達を連れてきた。

「ママ」

と呼ばれて行くと、

「これ何？」

と押入に隠しておいたクリスマスプレゼントを指差している。

慌てて、え、どれ？と何も見えないふりして襖を閉めた。

子供達は

「やっぱり大人には見えないんだ」

「次はうちで探そうよ」

と嬉しそうに話していた。

## 返事

---

君の名前を呼んでみる。

返事を期待して耳をすましてみても、部屋を満たす静けさに、君がもういない事を思い知らされるだけだった。

ため息を吐きながらソファーに腰を下ろす。

チリッという、こもったような音がした。

君の遺した首輪の鈴が、君の代わりにした返事。

## 別れ

---

彼が私に別れを告げ、私は何も言えずに彼の後ろ姿を見送る。

これは夢だ。

何ヶ月も前に終わった筈の現実が、あの時の痛みが、夢で繰り返されている。

それに耐えられなくなったある晩。

彼より先に、私から別れを切り出してみた。

目が覚めた時、なんだかいつもより余計に悲しかった。



## 春告鳥

---

蓋を開けると、中には女の子がちょこんと座っていた。  
どうしよう。なんでまだここに居るんだろう。  
何とかして出てってもらわないと。  
とりあえずそのまま外に出すと、ちょうど鳥が飛んできた。  
女の子は嬉しそうに箱から飛び出して行った。  
良かった。これで春が来る。  
僕はそっと蓋を閉じた。

## 煙草

---

晴れでもないけど、雨の降る心配もいらないような中途半端な空の下。

ぶらぶら歩いて君の所にやって来た。

煙草に火をつけて墓石の前に置く。

生前いくら言ってもやめられなかった煙草だもんね。

今日はたくさん吸いなさい。

最後の1本が無くなるまで、ここに居て火をつけてあげるから。

## 月蝕

---

月蝕の後、天使たちはそこらじゅうに落ちている月の影を拾い、月の裏側まで運ばないといけない。  
取りこぼした影は、朝になると真っ黒い猫になってしまうのだ。  
金色の瞳をしたその猫を使い魔にした魔女は、強力な魔力を手にすることができる。  
だから天使たちは後片付けに大忙しだ。

## あなたへの想い

---

もしかしたらあなたが振り返るんじゃないかと思って、ずっと後ろ姿を見ていた。  
でも、私から遠ざかるあなたの足取りは迷いがなくて、もう私の事なんて頭に無いみたいで。  
笑顔でいたかったのに...。  
あなたがなかなか振り返らないから下を向いた。  
あなたへの想いが地面に落ちていった。

## コーヒーカップ

---

苦い。一口飲んで気が付いた。

ということは。

「砂糖は入れるなって言っただろ」

彼がコーヒーカップを差し出す。

ごめんね、カップを間違えちゃった。

謝る私に、

「同じカップを使うからだ」

と素っ気ない彼。

私は別のカップにコーヒーを入れ直した。

そしてお揃いだったカップに花を刺した。

## 羊

---

クマは巣穴の中でぐるりと寝返りをうった。  
眠れない...。  
冬眠出来なかったら死んじゃうかも。  
そう思ったらドキドキして余計に目が冴える。  
こんな時は羊を数えるんだっけ。  
でもクマは羊を見た事がなかった。  
羊って何だろう。  
考えてたらいつの間にか夢の中。  
おやすみなさい。良い夢を。

## 特別な日

---

もっと歓迎されると思ってたのに。  
真っ暗な所に放り込まれそれっきり。  
そんなボクを誰かが抱き上げ、大きな木の下に置いた。  
捨てられたのかも。  
泣きそうになりながら胸元に手をやると...  
あれ？いつの間にかリボンが付いてる。  
「わー、可愛いぬいぐるみ」  
歓声と共に抱きしめられた。

## 引継ぎ

---

兎は焦っていた。

干支の引継ぎが迫っている。

「待っていたにゃ」

猫が干支の座を奪う為に戦いを挑んできた。

いつもなら簡単に振り切れるのに。

「ふふ。今年は力が足りないにゃね」

猫は兎の首に噛み付いた。

「貸しにゃ」

そのまま兎を啜え上げると、引継ぎの場に向かって走り出した。



## 煩惱

---

大晦日。悪魔が現れた。

「毎日一つ願いを叶えるので契約して下さい」

と腰が低い。

ボクは契約を交わした。

「ただし、同じ種類の願いはダメです。毎日新しい願い事を。そして願い事が無くなった時は契約通り魂を...」

悪魔はカレンダーの日付を数え始め、108 と言いながら 4 月 18 日に大きく花丸を書いた。

## おみくじ

---

初詣のついでにおみくじをひく事にした。

筒をよく振って逆さまにする。

坊主頭で古びた着物を着た、3センチくらいの男の子が転がり落ちてきた。

これは末吉だ。

私の掌でペコリとお辞儀をしている。なかなか可愛らしい。

連れて帰る事にしよう。

「一年間よろしくね」そっと肩に乗せた。

## 集会

---

猫又の集会に迷い込んだ。

取り囲まれ威嚇される。

猫又の一匹が

「試験に合格したら帰してやる」

と言った。

目の前にネコ缶が積まれた。

訳がわからないまま蓋を開けた。その度に猫又たちから歓声があがる。

全ての蓋を開け終えた時『合格！』と聞こえた。

気付けば辺りには空っぽの缶詰が散らばっているだけだった。

## 受賞

---

私の作品が受賞した。

でも『右手賞』って何？

電話で問い合わせる。

「作品の方はちょっとあれでしたが、あの量を手書きされたのはすごいという事で、特別に賞を・・・」  
あまりの話に声も出せないでいると、先方がはっとして言った。

「左利き、でございましたか」

沈黙は続く。

## メール

---

部屋を片付けていたら、昔使っていた古い携帯が出てきた。

「なんでそんなのってあるの？」

旦那に言われて、ちょっと困った。

今はもうあなたが言ってくれないような言葉が、この携帯のメールにたくさん残ってるんだもの。

正直に言ったら捨てるって言うでしょ？

## 雲の子ども

---

雪かきをしていたら、雲の子が埋まっているのを見つけた。

雪を仲間と間違えて地上に来てしまったらしい。

帰りたいと言うので投げてみたけど届かない。

風船につけて飛ばしたら高く上がって見えなくなった。

ほっとした帰り道。

萎んだ風船だけ落ちていた。

雲の子、ちゃんと帰れたかな。

## 過去と未来と

---

タイムマシンで過去に逃げた犯人は、将来俺の父親となる男の子を人質にした。

「この子を殺せば時空警察のお前は消える」

「やめろ！」

懸命の努力も虚しく、子供は殺されてしまった。

俺はがくりと膝をつく。

しかし奴は俺以上に動揺していた。

「何故お前は消えないんだ」

なんてことだ。母さん！

## 節分

---

弟が帰ってこない。

今日だけは気をつけろと言ったのに、きっとどこかで豆に触れて『外』に弾き跳ばされたに違いない。

「僕が迎えに行く」

身重の母さんには無理だし、父さんは去年『外』で受けた傷がまだ癒えてない。

頼りになるのは虎皮の腰巻きと金棒のみ。

僕は『外』へ飛び出した。



## 砂時計

---

気を付けていたのに。

祖母の砂時計を割ってしまった。

こぼれ出た砂はあっと言う間に飛び散った。

砂粒に見えるそれは時間を食べる小さな虫。

世界中の時間を喰い尽くす。

風も吹かなくなった世界から戻った虫を、泣きながらビンに閉じこめた。

あの人と過ごした時間が、さらさらとビンの中を流れた。

## 消える...

---

扉を開けると夫の靴があった。

「ただいま」

声をかけながら玄関をあがると靴下が転がっている。その先にはズボン。

だらしがないー。

廊下には背広とワイシャツ、ネクタイが一緒になって落ちていた。

いったいどんな脱ぎ方したのよ。

居間に入ると夫の頭部が床に飲み込まれ消えるところだった。

眼鏡が転がった。

## 君の気持ち

---

君の涙を追いかけた。

それを捕まえられたら君の気持ちがわかるような気がして。

だけどあっという間に見失ってしまった。

公園のベンチや学校の屋上、枕の下まで探したけど、結局見つけることができなかった。

諦めて戻ってきた時には君はもう笑っていて、やっぱり僕には君がよくわからない。

## 春を迎えに

---

「春はどこですか？」

店仕舞いの手を止めて振り返ると、狐の子が立っていた。

「春を迎えに来ただけど、どこにいるのかわからなくなっちゃって」

狐の子はそこで売り物の花に気付き、

「もうこの花が咲いている時期なのに」

と言って泣き出した。

私はその後、夜遅くまで狐の子に温室の説明をする事になった。

## 明日の天気

---

不思議な本を拾った。

いつ開いても明日の天気だけが表れる。ちょっとだけ便利だった。

ある日、明日はどうしても晴れて欲しくて、ページの上にマジックで『晴れ』と書いてみた。

翌日は見事な晴れ。

でもそれから後、私の書いた『晴れ』は消えず、ずっと晴天が続いている。

どうしよう。